

## ハーストンの黒人英語とその歴史的背景

後 藤 弘 子

### 1. はじめに

十七世紀初頭にイギリス人が新大陸を発見して以来、現在も尚、多くの移民を受け入れ、「人種のるつぼ」と言われるアメリカ合衆国には様々な方言や言語が存在する。中でも、人種別に分けて白人の次に多いアフリカ系アメリカ人の話す言葉に「黒人英語」がある。黒人英語の起源は大きく分けて二つの説がある。まず一つは、奴隷時代の白人の主人が話す英語が起源であるという、英語起源説である。奴隷の黒人たちは白人の英語を聞いたが、知性が低いために正しい英語を使うことが出来ないという白人英語至上主義者の考えである。しかし、黒人の知性が低いというのは白人英語至上主義者の偏見的な考え方であり、「人間」は誰でも生まれながらに言語習得の能力を持っており、人種によって知性が低いと考えることは出来ない。

もう一つの考えにクリオール起源説がある。アメリカ合衆国には、西アフリカや西インド諸島から強制的に多くの奴隷が移住してきた。これらの奴隷は、奴隷同士、あるいは主人との意思伝達のためにピジン英語を用いるようになる。このピジン英語を母国語とする人々の子供が使用する語がクリオール英語である。このクリオール英語が今日の黒人英語の起源であると考えるのがクリオール起源説である。十八世紀になると、アフリカのピジン英語は世界中に存在したと考えられている。アメリカ合衆国においても、いくつかの資料にアフリカ系ピジン英語が残っている。したがってピジン英語がやがてクリオール英語に発達し、言語接触を起こ

しながら次第に黒人英語へと発達したと考えるのがクリオール起源説である。

本稿では、黒人英語の起源はクリオールであるという立場から、初期黒人英語と1934年のゾラ・ニール・ハーストン (Zora Neal Hurston) の『ヨナのとうごまの木』(*Jonah's Gourd Vine*) 中の非標準英語を比較していく。言語は接触することで自然に変化していくものであり、地理的にも多少の差異は生じるため、ハーストンの用いる黒人英語が必ずしも二十世紀初期の黒人全てが話す英語であるとは限らないが、黒人の用いる言語の特徴を十分に、かつ確実に記述していることから、黒人の間で話されていたという一つの例として取り上げることに問題はないと考える。本稿では黒人英語の主な三つの特徴である、be 動詞、完了相の done と been を取り上げている。これらが初期黒人英語と、ハーストンの時代でどれほど変化し、またどのような変化を辿ったのか、その変化の過程を深層構造と表層構造の両面から分析していきたい。そして二十世紀初頭の黒人英語は脱クリオール化にあるのか、初期黒人英語と深層構造において同じであるのかということをも明らかにしていくことがこの論文の目的である。

## 2. 『ヨナのとうごまの木』の英語

ハーストンの『ヨナのとうごまの木』は、1934年にその初版が発行され、当時のアメリカ南部の田舎の黒人たちの方言を見事に書き表していることで評価されてきた。この論文では、『ヨナのとうごまの木』に見られる黒人英語の特徴を明示し、1930年代のアメリカ南部における黒人英語の構造を明らかにしていきたい。

この時代の黒人英語は、もちろん現代のアメリカにおける黒人英語とは異なる点が多いのであるが、本稿で特に注目したいのは、初期の黒人英語と比べてすでに脱クリオール化されているのか、あるいは初期の黒人英

語と深層構造において大きな変化はないのかという点である。本稿では『ヨナのとうごまの木』における英語と初期黒人英語を比較して黒人英語の本質に触れたい。

まず、be 動詞から見ていこう。

### 3. be 動 詞

#### 3.1 be 動詞の欠如

- (1) a. you always talkin' more'n you know. (are) (p.1)  
 b. Who dat comin' heah, John? (is) (p.2)  
 c. Some white folks passin' by, mama. (are) (p.2)  
 d. Ahm jes' lookin' tuh see whar dey gwine. (are) (p.2)  
 e. Ned Crittenden, you raise dat wood at mah boy, and you gointer make uh bad nigger outa me. (are) (p.2)  
 f. … but you tryin' tuh start uh great big ole ruction 'cause Ah tried tuh chesstise dat youngun. (are) (p.3)  
 g. Yet and still you always washin' his face wid his color and tellin' 'im he's uh bastard. (are) (p.3)  
 h. You mealy-moufin' round cause you skeered tuh talk back tuh Rush Beasley. (are) (p.6)  
 i. …, Amy, sixteen years old and look lak he twenty. (is) (p.6)  
 j. He gwine come git 'im tuhorrer. (is) (p.7)  
 k. One 'bout ez bad as tother. (is) (p.8)  
 l. Ole Marse got de yaller nigger totin' his silver cup and eatin' Berksher hawg ham outa his kitchin when po' white trash scrabblin' 'round in de piney woods huntin' up uh razor back. (is) (p.9)  
 m. Yaller nigger settin' up drivin' de carriage and de po' white folks

- got tuh step pit de road and leave 'im pass by. (is) (p.9)
- n. You always runnin' yo' race down. (are) (p.10)
- o. Niggers gwine faint too. (are) (p.10)
- p. Where you goin', son? (are) (p.10)
- q. Youse slow, but wid him keerin' on lak he do now, hit takes uh  
Gawd tuh tell whut gwine happen in dat house. (is) (p.11)
- r. So he tryin' side wid dem and show 'em he don't. (is) (p.11)

上の例を見てわかるように、be 動詞が欠如するのは、進行形、特に現在進行形の be 動詞、あるいは gwine, gointer 等の前の be 動詞が多く、過去の be 動詞 was が削除されることは少ない。

次に、be 動詞が欠如しない場合をみていこう。『ヨナのとうごまの木』における英語は、現在形は人称に関わらず is で、過去形は was で、主語が I の場合の現在形は am である。

### 3.2 be 動詞のある文

- (2) a. You sho is one aggervatin' 'oman. (p.1)
- b. you ain't got the sense you wuz borned wid. (p.2)
- c. Yo brazen ways wid dese white folks is gwinter git you lynched one  
uh dese days. (p.2)
- d. Ah wuzn't de last one inside. (p.2)
- e. You know Ahm uh fightin' dawg and mah hide is worth money. (p.3)
- f. He is jes' ez obedient tuh you and jes' ez humble under yuh, ez he  
kin be. (p.3)
- g. You washed 'im up jes' lak he wuz gold den. (p.3)
- h. …, whut kinda 'oman is you nohow? (p.4)
- i. You think Ah'm gwine take uh 'nother man's youngun and feed 'im

- and close 'im fuh twelve years and… (p.4)
- j. Us black niggers is de ones s'posed tuh ketch de wind and de table. (p.4)
- k. Ole Marse didn't ast me of hit wuz rainin' uh snowin'uh hot uh col'. (p.4)
- l. When Old Massa wuz drivin' you in de rain and in de col' - he wasn't don' it tuh he'p you 'long. (p.5)
- m. Niggers wuz made tuh work and all of'em gwine work right long wid me. (p.5)
- n. Is dey harder tuh learn? (p.9)
- o. Ah laks it jes' fine, and dis sho is uh pretty house. (p.18)

(1) の例と比較してわかるように、過去 be 動詞 was は、削除されにくい。これは、過去形であることをはっきり示したいからであろう。一方、(1) の例で多かったように、gwine (be going to) の前の be 動詞が削除されやすいのは、-ing があれば進行形であることは推測でき、また gwine も同様、簡単に意味が推測できるため、be 動詞がなくてもほとんど誤解を生じることなく伝わるからである。

一方、(2b, m) のように、受動態の be 動詞は削除されにくい。それは、受身文、be p.p の be 動詞は削除されると過去分詞のみが残ることになる。しかし、黒人英語において、過去形と過去分詞をはっきりと区別して使い分けることは少なく、同形で使われることが多い。そのため、受身文の be 動詞が削除されると過去の文との区別がつきにくい。よって受身文の be 動詞は削除されないと考えられる。つまり、この時代の黒人英語において、be 動詞は深層構造において存在し、それが重要な意味を持たない、削除されることで意味上の誤解を生じにくい場合は削除されることがあると考えられる。しかし、初期の黒人英語では be 動詞は深層構造になかった。

次に、初期黒人英語における be 動詞の使われる文と、使われない文を見ていこう。

(3) 初期黒人英語の繫辞

- a. No, this [a monkey of an unusual species and color] no my wife, this fit wife for you. (is) (p.162)

「いや、これ [変わった種類の変った色をしたサル] 私の女房とちがう、これ、あんたの女房にぴったりや」

- b. He tell me he god. (is) (p.89)

「彼はわしに自分は神だと言うのだ」

- c. Kay, massa, (says he), you just leave me, me sit here, great fish jump up into de canoe, here he be, massa, fine fish, massa; me den very grad; ... (p.98)

「へい、だんなさん (と彼は言う) だんなさんがいかれると、おらはここにすわってただよ。すると大きな魚がとびこんできただよ。りっぱな魚だぞ、だんなさん。おらはとてもうれしかったで…」

- d. Massa shentiman; I be cash crab in de Wye rive; found ting in de mud; tone, big a man's foot: hole like to he; fetch Massa: Massa say, it be de Indian Mocasson. — Oh! Fat de call it all tone. He say, you be a filasafa, Cuff! Isay, O no, Massa, you be the filasafa. (p.105)

「だんな様、わたしは、ワイ川でかにをとっていただ。そんで泥の中に石をみつけただ。人間の足ぐらいあるおおきなやつだ、全く足に似ているんで、それをとってきたんです。だんながおっしゃるにや、それはインディアン靴だ」と。どうしてそんな石ころをそう呼ぶんだろう、とわたしが言ったんだ。するとだんなはお前は哲学者だとおっしゃった。」 (小西: 1978)

(3a) はウィリアム・スミスの『ギニアへの新しい旅』(1744) に出てくるアフリカ人の言葉であり、(3b) は1692年のアフリカ系アメリカ人の言葉であり、(3c) は十八世紀後期の北カロライナの奴隷の言葉であり、(3d) は同じく十八世紀後期の、ヒュー・ヘンリー・ブラッケンリッジの『近代騎士道』(1792) に出てくるギニアの黒人のクリオール言語である。(3a, b) のように、アフリカ奴隷のピジン語には繫辞はなかった。十八世紀後期以降、be が見られる (3c, d)。(3c, d) の be はその動作が継続するという意味の be である。

ディラード (1972) の述べる be 動詞の使われる文と使われない文を次に挙げよう。

#### (4) 黒人英語における繫辞

- a. He be waitin' for me every night when I come home. (p.48)  
 b. He waitin' for me right now. (p.48)

ディラードは (4a, b) は黒人英語の特徴として、(4a) の黒人英語の be は every night と相関しており、(4b) は right now が必ず文中にあることが重要とし、これらは文法的に異なると述べている。つまり、(4a) の be は以前からずっとその動作 (ここでは家に帰ったとき待っているという動作) が続いているという継続の be である。一方、(4b) は right now があることからはっきりするように、一時的な意味を表わす場合には be 動詞は使わないのである。よって黒人英語において、be 動詞があるかないかで、意味を完全に区別する。(4a) は (3c, d) と同様に、一定の期間中、その動作が継続するという意味を持つ。しかし、(3a, b) のように繫辞のない文で例え right now が文中に存在しなくても、繫辞の削除と捉えるのは間違いである。それはまた、次の (5) のように、黒人英語では白人の言葉を真似て誤った繫辞を表層構造に入れることがあることから、これらの繫辞のない文が繫辞の削除でないということがわかるだろう。次の

例は *Dictionary of American Regional English* (1985) (以下 *DARE*) からのものである。

- (5) a. Spouse he want to know how old you be first. (p.176)  
 b. She am de catty. (p.177)

つまり、初期黒人英語においてはハーストンの文法とは明らかに異なり、深層構造には継続相の *be* はあるが、繫辞を表わす *be* 動詞はなかった。ところが、ハーストンの時代においては *be* 動詞は深層構造に存在し、意味上問題がない場合には削除されるという、脱クリオール化にあるため、まだ標準英語と同じとは言えないが、*be* 動詞も獲得しつつあると言える。

### 3.3 Ahm

*Ahm* は、*I am* の縮約形のようにもみえるが、初期黒人英語における *Ahm* について、ディラード (1978) は「黒人英語の *I* の非標準形式に対しては *Im* を、標準英語の *I am* の縮約形に対しては *I'm* と書くことにしたい。*Im* が *I am* の縮約形でないことは、*Im is* ~, *Im am* ~ のような形式がかなり存在することからも明らかである。」と述べている。また、シュナイダー (1989: 170) は、初期黒人英語の一人称の形を、標準英語と同じ *I* (または *Ah*) あるいは *I'se* としている。つまり、黒人英語において、深層構造に *be* 動詞を獲得する以前、一人称単数は *I*, *Im*, *Ah*, *Ahm*<sub>1</sub>, *I'se* が使われていた。*Im*, *Ahm*<sub>1</sub>, *I'se* は *be* 動詞を持たない黒人にとって、白人の *I'm* (*I am*) や *I'se* (*I is*) を耳にしていくうちに、それらは *I* の変形であると思ったと考えられる。それを証拠付ける例として、*be* 動詞を獲得し始める頃から、*Im is* という以下の例 (6a-c) が挙げられる。また、(6d-f) の例は *I* の変形として使われていた *I'se* の例である。年号を見ると、*be* 動詞を獲得し始めた *I'm is* の方が、まだ *be* 動詞を深層構造には持たない *I* の変形の *I'se* の文より後なののがはっきりと分かる。



- (6) a. I'm is the one! (1914)  
 b. You begrudge me a li'l bit o'licker to keep me from ketchin' col',  
 wet as I'm is? (1927)  
 c. While I'm is got this trip, I'm gonna see what I can see. (1959)  
 d. I'se pow'ful skeered; but neversomeless I ain't gwine run away.  
 (1875)  
 e. I'se monstrous hungry. (1907)  
 f. "Ise gwine, Ise gwine," Simon answered pettishly. (1929)  
 (DARE: 1985)

次に、ハーストンの作品中の Ahm を見てみよう。

- (7) Ahm
- a. Ahm jes' lookin' tuh see whar dey gwine. (p.2)  
 b. You know Ahm uh fightin' dawg and mah hide is worth money.  
 (p.3)  
 c. Ahm dey mama. (p.3)  
 d. And Ahm de pappy uh all but dat one. (p.3)  
 e. ..., and Ahm uh whole heap younger'n you. (p.4)  
 f. Ahm three times seben and uh button. (p.5)  
 g. Reckon Ahm gwine seill dat sow and feed de mules. (p.7)  
 h. Amy, Ahm tellin' yuh, git dat punkin-colored bastard outa dis  
 house. (p.9)  
 i. Ahm comin' heah plenty mo' times and den Ah tell yuh whut it say.  
 (p.16)  
 j. Ahm po' folks jes' lak you. (p.19)  
 k. Ahm yo' granny! (p.19)  
 l. Ahm jes' wishin' Mist' Alf would lak mah work and lemme stay

- heah all de time. (p.19)
- m. Yussuh, Ahm powerful glad dey do, 'cause Ah laks 'em. (p.20)
- n. Ahm comin'! (p.22)
- o. Ahm free, Minnie, Ah beat yuh in home. (p.23)
- p. Ahm fourteen. Ahm big. (p.23)
- q. Ahm gwine race huh jes' soon ez Ah gits tuh school. (p.23)
- r. Ooh, John, Ahm so glad you kilt dat ole devil. (p.34)
- s. How Ahm gonna let uh li'l' bit lak you fall? (p.35)
- t. Ahm uh li'l' piece uh leather, but well put t'gether, Ah thankee,  
Mist' John. (p.35)

(7) の例を見てもわかるように、be 動詞が必要ない文において、Ahm は使われていない。また、過去 be 動詞文においても Ahm was という形はなく、I (Ah) was という形のみ用いられている。よって、ハーストンの時代には Ahm と I は区別しており、Ahm = I am という文法を獲得したと言える。つまり、一人称+be 動詞の変化は次のようになされたと言えるだろう。

(8) I  $\emptyset$  > Ahm<sub>1</sub> > I'se > Im is > Ahm<sub>2</sub> > Im am > I am

### 3.4 youse

二人称を表わす youse についてみていこう。初期黒人英語では、二人称は単数形も複数形も、音韻的変形 (yuh, yo', yer) はあるものの、標準英語と変わりなく you が用いられていた。また、(3), (4) で示したように、深層構造に be 動詞は存在しなかった。

一方、youse<sub>1</sub> が you is の短縮形と考えることに問題があるのは、黒人英語は深層構造に be 動詞を持たないためであるが、DARE の (9) の例のように、黒人英語において be 動詞を獲得したと考えられる you is が使

われる最初の例が,  $youse_1$  が使われ始めた年よりずいぶん後であることからわかる。つまり, 黒人英語において  $youse_1$  も *be* 動詞を獲得する前から単複同数の *you* の変形として使われていた。

- (9) Ah wants to see yo' fawm, Sid. Le's see what kinda fawmuh you is.  
(1953)

また,  $youse_1$  が *be* 動詞を獲得する前に用いられていたとすると, 一人称が  $Ahm_1$  を用いてから *I am* を獲得するまでの間に *Im am* という形が表れていたように, 二人称も *you is* を獲得する前に (10) のように  $youse_1$  が *you is* という形が用いられていたと考えられる。このことから  $youse_1$  が *you is* の縮約ではないと言える。

- (10) youse is a viper! (Berrey 1954: 288)

【ヨナのとうごまの木】の中では,  $youse_2$  は次のように使われている。

- (11) ハーストンの  $youse_2$
- a. Yo' mammy mought think youse uh lump uh gold 'cause you got uh li'l' white folks color in yo' face,... (p.2)
  - b. Youse tryin' tuh fight 'im on de sly. (p.3)
  - c. Youse uh lie! (p.5)
  - d. Youse uh nother one, Ned Crittenden! (p.5)
  - e. Youse uh big boy now and you am gwine take and take offa 'im and swaller all his filth lak you been doin' here of late. (p.11)
  - f. Dey make lak he love you better'n he do de rest on 'count youse got color in your face. (p.11)
  - g. Youse always uh runnin' and uh rippin' and clambin' trees and ...

(p.11)

- h. youse talkin' at de big gate now. You jus' want somebody tuh notice tuh. (p.14)
- i. Youse real good tuh me. (p.21)
- j. Youse uh lie! (p.24)
- k. Youse uh liar, madam! He did so hide wid me. (p.24)
- l. When youse thru wid yo' work. (p.32)

(11) のように、ハーストンの英語の中で you is のように you と is が連続する形はみられない。同じ進行形の文でもゼロ繫辞の文、you Ving と同時に youse<sub>2</sub> Ving の文があるということは、ハーストンは、youse<sub>2</sub> = you is という文法を獲得していることになる。しかし、you is という形は表層構造において is が脱落するため、you, あるいは youse<sub>2</sub> が用いられている。つまり、脱クリオール化の過程で、be 動詞を獲得しつつあるのだが、いつ be 動詞が入るのかを完全には獲得してはいない。youse<sub>1</sub> は be 動詞を獲得する前から you の変形として使われていたが、その後次第に深層構造に be 動詞を獲得することでハーストンの時代では you is の変形として用いられていた。従って you + be 動詞は次のように変化したと言えるだろう。

(12) you  $\emptyset$  > youse<sub>1</sub> > youse is > you is, youse<sub>2</sub>

#### 4. done

完了の done は、初期黒人英語では、次のように用いられていた。

(13) She done sung. 'She sang recently.' (Dillard 1975: 86)

上の例の標準英語の訳において、過去形が 'sang recently' であるように、ディラードは、この done を近接完了相と呼んでいる。ディラードはまた、「done に関するさらに興味あることのひとつは、done が他のピジンやクリオール諸言語にも見出されるということである。」(1972: 47) と述べている。従って、この近接完了相の done はピジン・クリオール起源のもので、現代標準英語完了を表わす have とは異なるため、単に done p.p を標準英語の have p.p のように訳するのは間違いである。また、小西 (1978) は、done の用法として、done Verb, done pastV, done p.p の間にはかなり微妙な意味の差があると言っており、例えば done go は現在の時点を示すのに使われ、done went は過去における近接完了を示し、done gone は擬似形容詞的に使われるとしている。

一方、シュナイダー (1989) は、完了相の done について、完了相 done は、ディラードと同様、直前のことを述べる時に用いる「近接完了」を表わすとしている。一方、done の後の動詞については次のように述べている。

- (14) The following verb form is usually the pp. Only 16 of the instance recorded have a following uninflected verb form, which again, in the case of regular verbs, can be construed as a participle with a phonologically deleted dental suffix. I could not discover a semantic or functional distinction between done pp and done V.

(1989: 121)

つまり、ふつうは done p.p であるが、done Verb (規則動詞) もあり、それは過去分詞を示す接尾辞 -(e)d の脱落によるものであり、表層では原形に見えるが、深層では done p.p であり、これらの間に意味的、機能的な区別はないとしている。接尾辞 -(e)d の脱落については、後の (18) で詳しく述べるとしよう。さらにディラードは been も含めて完了相の起源

は、イギリス英語方言と、それが単純化したピジン・クリオール言語の二つとしている。また、ラボフ (1972) は、次のように黒人英語の *have* とは異なる *done* の用法の一つとして強意の *done* を挙げている。

- (15) a. 'Cause I'll be done put — stuck so many holes in him he'll wish he wouldna said it.  
 b. I done about forgot mosta those things.

ラボフは (15) のような強意の意味を持つ *done* は *have* とは異なり、*already* や *really* のような、副詞の機能をなすとしている。次に、ハーストンの *done* の用法はこれらの近接完了や強意の意味を持っているのか、見ていこう。次の (16) の翻訳は徳末 (1996) からのものである。

(16) ハーストンの *done*

- a. ... and Ah done seen yuh let'em wait uh powerful long spell some time. (p.4)  
 「おめえさんがいつも皆を長えこと待たすんを見て来たっぺな。」
- b. Youse mad cause Beaseley done took dem two bales uh cotton us made las' yeah. (p.5)  
 「去年、わっしらがとった綿 2 包み、ビーズリイに持ってかれちまったんで、怒ってんだっぺ。」
- c. Us done made sixteen bales uh cotton and ain't even got uh cotton seed to show. (p.6)  
 「16包みあつたんだけど、来年蒔く綿の種もねえなんて言われて。」
- d. Ah done done it. (p.6)  
 「おらもう決めて来たど。」
- e. Lawd, Ah speck you done kilt yo' pappy, John. (p.8)

「なんちゆうこった。ジョン，お前父ちゃん殺しちゃったん  
じゃねえか。」

f. Ah done spoke. (p.10)

「おら，約束したんだ。」

g. Ah done swum dat ole creek, mama- (p.11)

「おら，あん河何べんも泳いだことあっと。」

h. He done turned off his coachman fuh stovin' up one uh his good  
buggy hawses. (p.17)

「馬車引きのええ馬にけがさしたんで，前の御者さ首にしたとこ  
だから。」

ハーストンの時代には *done pastV* または *done p.p* の2種類が見られるが，  
これらは過去分詞を完全には獲得出来ていないためであり，全て *done p.p*  
と考えてよいだろう。

ハーストンの *done* 用法は，前後の文脈から (16a) は「継続」，(16b, c)  
は「結果」，(16d, e, f) は「結果」・「強意」，(16g) は「経験」，そして  
(16h) が「完了」の意味を表わしていると考えられる。つまり，ディラー  
ドやシュナイダーの言う近接完了の意味だけでなく，標準英語の現在完  
了の助動詞 *have* の意味に近く，「継続，結果，経験，完了」の意味で用い  
られている。深層構造は初期の黒人英語の *done* ではなく，標準英語の  
*have* で，表層構造では *done* が残っていると考えるとよいだろう。一方，  
(16d, e, f) のように強意と思われる文もある。これはラボフの言う黒人  
英語独特の強意の *done* が残っているものである。ハーストンの時代の  
*done* は完全には脱クリオール化されていないが，初期黒人英語とは深  
層構造が異なっており，脱クリオール化にある。

次に，初期黒人英語において同じく完了相として用いられていた *been*  
を見てみよう。

5. **been**

黒人英語における *done* が近接完了を表わす完了相であったのに対して、*been* は *done* よりさらに前に起ったことを表すときに用いる、遠隔完了を表わす。次の例 (17) を (13) と比較するとよくわかる。

- (17) a. He been know that.  
 b. I been knowin' him a long time. (Dillard 1972: 46)  
 c. She been sung. 'She sang a long time ago' (Dillard 1975: 86)

ディラードは、*been* は明らかに完全に過去に起こった行為を表わし、遠隔完了相と言っていいと述べている。また、小西 (1978) は (17a, b) の訳をそれぞれ、'He knew that.', 'I have been knowing him a long time.' と訳しており、単に標準英語の *have* の脱落と考えるべきでないとしている。また小西は、黒人英語の *I been know* と標準英語の *I knew* とを比べてみると、黒人英語のほうが遠い過去であることを強調していると述べている。一方、シュナイダー (1989) は、*been* の構造を *been Verb*, *been Ving*, または *been p.p* であるとし、それらの起源は標準英語の *have been + verb* 形式の *have* の脱落、または黒人英語の遠隔相としている。(18) はシュナイダー (1989) からの例である。

- (18) a. I been making ready for years.  
 b. ...an' we been livin' round here ever since.  
 c. Well, Missus, I been put on de road to 75 years.  
 d. ...when dey come home [from the war] ...an dey say he been wounded...  
 e. De old man Anthony Ross, he been have a good mind to his



colored people all de time.

- f. I remember, when I been baptize dere... Oh, my happy, dey been fix us up dat day. Put on us clean homespuns en long drawers, dat been hang down round us ankles like boots. (pp. 118-120)

シュナイダーは、been の後の動詞が (18a, b) や (18c, d) のように Ving か p.p であれば、標準英語の have の脱落によるものであり、一方、(18e, f.) の能動の意味を持つ been Verb, または受身の意味を表わす been p.p は標準英語を起源と考えられないとしている。ただし (18d) は過去完了受身の had の脱落である。(18e) は、能動態の構造で、過去の動作に用いられる been Verb (原形) の形である。つまり、(18e) の 'been have a good mind' の意味は 'had a good mind' となるのだが、このように過去の動詞 (had) を使わないのは、黒人英語では過去形を近接過去 done p.p と遠隔過去 been p.p / Ving の2種類で使い分けをしているため、過去形で表わすことはないのである。また、同じ been Verb でも (18f) は深層構造は受動態であるが、接尾辞の -ed の脱落によって表層では原形に見える構造である。-ed ([t], [d]) の脱落が起こるのは、子音連続を避けるためであり、この語末の子音連続による [t], [d] の脱落は白人の非標準英語など、黒人英語に限らずよく見られる。また、不規則動詞の場合、語末の子音が重複していても脱落が起きないのは、不規則動詞の語末子音を削除すると、went-wen', felt-fel' や, stun' は stung, stunk の両方が考えられるように、規則動詞に比べて何を意味しているのかわかりにくいためだろう。従って、シュナイダーは (18f) のような構造は規則動詞にのみ適用されると述べている。しかし、(18) を見てわかるように、同じ been + verb が後の動詞によって起源がそれぞれ異なるというのは非常に複雑で不自然であり、考え難い。したがって、黒人英語の過去形は、近接過去の done p.p と、遠隔過去の been Verb があり、また、(17b) や (18a, b) のような遠隔過去の been Ving は、過去に起きたことが続いている場合に用い、標

準英語に訳すと have been Ving, あるいは had been Ving の2つの意味を持っていると考えられ、継続の動作・行為が、今も尚続いている現在完了進行形なのか、もう過去に終わってしまった過去完了進行形なのかは文脈判断になる。つまり、黒人英語における been は遠い過去で起こった事柄を表わす黒人独自の用法であり、標準英語とは深層構造が異なり、標準英語が起源ではないと言える。ハーストンの been 用法を見てみよう。

## (19) ハーストンの been

- a. You jes took tuh buckin' 'im since you been hangin' round sich ez Beaseley and Mimms. (p.3)

「ビーズリイや、ミムズと付き合いだしてから、あの子にひでえことするようになって。」

- b. Come hawg-killin' time Ah been married tuh you twelve years and Ah done seen yuh let 'em wait uh powerful long spell some time. (p.4)

「豚殺す季節になりゃ、おめえさんと結婚して12年だっぺ。おめえさんがいつも長えこと待たすんを見て来たっぺな。」

- c. Us been heah too long. (p.6)

「もうこげんとこさあきあきだ。」

- d. You jes' started tuh talk dat foolishness since you been hangin' 'round old Mimms. (p.9)

「ミムズんとこでうろつくようになってから、そげなあほらしいこと言い出して。」

- e. Ah jes' been worried 'bout you and him. (p.11)

「母ちゃんさ心配なんは、おめとネッドさこった。」

- f. Youse uh big boy now and you am gwine take and take offa 'im and swaller all his filth lak you been doin' here of late. (p.11)

「おめはもうでかくなって、あん人さ追いこしそうになってる

けに、おめさつらく当たるんだと。]

- g. Folks whut wuz borned in slavery time to go 'round cakkin' dese white folks Masse but we been born since freedom. (p.14)

「奴隷時代に生まれた人は、白人のこと旦那なんて行ってっけど、私達は解放されてから生まれたんだもん。」

- h. It's been tried. (p.18)

「僕も何人か使ってみただね。」

- i. Ah been countin' most all de time. (p.24)

「わっし、ずうっと数えてばっかだもん。」

- j. He been right dere skeering' folks since befo' Ah wuz borened. (p.34)

「あいつはね、あたしなんかの生まれる前から皆を恐がらせたのよ。」

ハーストンの作品には、ディラードやシュナイダーの言う *been Verb* (原形) の構文は見られない。どの文も *been Ving* かあるいは *been p.p* である。形から見ると現在完了の助動詞 *have* の脱落と考えられるが、例えば (19d) のような文を標準英語に直すと 'You just started to talk that foolishness since you had been hanging around old Mimms.' と過去完了の文になるだろう。このように標準英語に直すと現在完了では誤った文と考えられるものもあるが、その文の持つ意味はどれも過去に起こったことが今も尚続いている場合に用いられている。つまり、意味から判断すると、どの文も完了の意味を持つため、助動詞の *have / had* の脱落と考えられる。よって、初期黒人英語とは深層構造において明らかに異なり、ハーストンの時代には黒人英語は深層構造では既に *have been Ving / p.p* の構文を獲得しており、表層構造において、単純化によって *have* の脱落が起こっていると言える。

## 6. 仮定法過去完了

上述した通り、ハーストンの英語において、完了の助動詞 *have* は使われていない。しかし、興味深いことに、仮定法過去完了の文では標準英語と同じ用法で *had* が用いられている。

### (20) ハーストンの仮定法過去完了

- a. *Us wouldn't be in dis fix ef you had uh lissened to me.* (p.6)

'*We wouldn't be in this fix if you had listened to me.*'

「おめえさんがわっしの言うことさ、聞いてくれたらこんな目にあわねえで済んだっぺな。」

- b. *Dey tole me tuh go find work, but Ah wisht dey had uh tole me school.* (p.15)

'*They told me to go find work, but I wished they had told me about school.*'

「仕事探してこって、いわれたど。でも、学校の事さ誰も言ってくれねかった。」

前にも述べたように、ハーストンの時代には現在完了は完了助動詞 *have* でなく *done* が用いられていたり、*have* が脱落したりと、表層構造において標準英語とは異なる構造が見られた。しかし、(20) の例文のように、*if* 節や *wish* と共起すると *had p.p* の仮定法過去完了の構造が表層にも表れている。つまり、ハーストンの英語では完全に仮定法過去完了の *had p.p* の用法を獲得したと言っていいだろう。このような複雑な仮定法過去完了の用法を獲得しているとすれば、*done* や *been* 用法も初期黒人英語の *done* や *been* からは脱クリオール化にあり、深層では *have* を獲得しつつあると言える。

## 7. お わ り に

黒人英語の構造を歴史的に見ることでその成立と変化の過程を明らかにすることを目的としてきた。そのためにここでは主に1934年のゾラ・ニール・ハーストンの『ヨナのとうごまの木』における黒人英語を初期黒人英語と比較し、その言語の変化を知ることが出来た。黒人英語の文法的特徴は少なくないが、本論文では主に黒人英語の特徴を顕著に表している三つに絞った。第一に、be 動詞については、本来黒人英語において be 動詞は深層構造には存在せず、be 動詞があるかないかで意味を区別していた。標準英語の be 動詞とは異なる、継続相の be が用いられていた。一方、ハーストンの小説の中の英語は、is / was が深層構造にあり、be 動詞が脱落することで意味解釈に支障がない場合には、表層構造において脱落する。つまり、継続相の be があり、繫辞の be 動詞が存在しないという初期黒人英語の構造からは脱クリオール化にある。be 動詞の複数形の are や過去形の were はまだ全く表層構造においても表れていないということは、まだ標準英語の語彙を使っていないことになる。まだ完全な脱クリオール化にはない、脱クリオール化の途中段階である。

第二に、be 動詞について考えていく中で、Ahm と youse について議論した。ここで興味深いのは、Ahm と youse はそれぞれ I am, you are なのか、つまり、be 動詞を獲得しているのかどうかであるが、Ahm<sub>1</sub> は、黒人英語においては be 動詞を獲得する前に I の変形として用いられていた。しかし、ハーストンの Ahm<sub>2</sub> は I とは区別しており、Ahm<sub>2</sub> = I am という文法を獲得している。したがって、同じ Ahm でも be 動詞を獲得する前は I の変形として、また be 動詞獲得後においては I am の縮約形として用いられていることがわかった。同様に、黒人英語において、youse<sub>1</sub> は be 動詞を獲得する前から you の変形として用いられていた。次第に深層構造に be 動詞を獲得し、youse is という形から、you is という文法を

獲得していった。一方、ハーストンは *youse is* という形は全く用いておらず、*youse<sub>2</sub>* は *you is* の変形として用いていたことがわかった。従って、Ahm も *youse* も、初期黒人英語から用いられてはいるが、初期黒人英語では深層構造において *be* 動詞は獲得していないため、単純に *I*、あるいは *you* の変形であった。しかし、ハーストンの時代になると深層構造において *be* 動詞を獲得しつつあるため、*I am*, *you is* の代用として用いていたという点でそれ以前の黒人英語と全く異なるということがわかった。

最後に、完了の *done* と *been* について、初期黒人英語においては *done* は近接完了を、*been* は遠隔完了を表わすことを見た。*been* は遠隔過去でも後ろの動詞によって使い分けがなされている。*been Verb* の場合は遠い過去を、*been p.p* は受動態の意味を含み、*been Ving* であればその動作が過去からずっと続いてきたことを表わす。ハーストンの英語における *done* 用法は標準英語の完了の *have* に置き換えても全く問題がないため、深層構造においては標準英語の *have* 用法と同じ機能をなし、表層においてはまだ黒人英語の *done* が使われていると思われる。ハーストンの *been* 用法は、深層構造においては標準英語の完了進行形の *have been Ving*、あるいは完了受身の *have been p.p* の文法を既に獲得しており、単純化のために表層構造においてその *have* の脱落が起こったということがわかった。

本論文は、黒人英語の起源を考察し、黒人英語の特徴の一部に触れたにすぎないが、三つの重要な構造について、初期黒人英語とハーストンの英語を比較することで、黒人英語の歴史的変化を明らかにすることができた。更に、少なくともハーストンが用いていた英語は、深層構造においては初期黒人英語とは明らかに異なり、まだ完全ではないが脱クリオール化しつつあるということがわかった。二十世紀後半のほんの数十年の間に、テレビやラジオの普及や教育制度の発達などから、黒人英語は標準英語の影響を多分に受けてきた。しかし、完全な脱クリオール化に向かいつつも、黒人は日常会話の中に彼ら独自の言葉を残しているのである。

## 参考文献

- Berrey, Lester V. and Melvin Van Den Bark (1954) *The American Thesaurus of Slang*, George G. Harrap.
- Cassidy, Frederic G. ed. (1985) *Dictionary of American Regional English*, vol. I, Belknap Press of Harvard University Press.
- Craigie, Sir William A. and James R. Hulbert ed. *A Dictionary of American English: On Historical Principles*, vol. I, University of Chicago Press.
- Dillard, Joe L. (1976) *American Talk: Where Our Words Come From*, Random House.
- Dillard, Joe L. (1972) *Black English: Its History and Usage in the United States*, Random House. (小西友七訳『黒人の英語—その歴史と語法—』研究社 1978)
- Dillard, Joe L. ed. (1975) *Perspectives on Black English*, Mouton.
- Ewers, Traute (1995) *The Origin of American Black English: Be-Forms in the HOODOO Texts*, Walter de Gruyter.
- Ferguson, Charles A, Health, Shirley Brice and David Hwang ed. (1981) *Language in the USA*, Cambridge University Press.
- Hurston, Zora Neal (1934) *Jonah's Gourd Vine*, Harper & Row, Publishers. (徳末愛子訳『ヨナのとうごまの木』リーベル出版 1996)
- 小林泰秀 (1994) 「黒人英語の成立と構造」『広島女学院大学論集』第44集.
- 小林泰秀 (1980) 「黒人の英語と言語の自然性」『広島女学院大学論集』通巻30集.
- 小林泰秀 (1997) 「ハーストンとスタインベックのスペリング」『広島女学院大学論集』第47集.
- Labov, William (1972) *Language in the inner city: Studies in the Black English Vernacular*, University of Pennsylvania Press.
- Schneider, Edgar W. (1989) *American Earlier Black English: Morphological and Syntactic Variables*, University of Alabama Press.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner prep. (1989) *The Oxford English Dictionary*, vol. II, Second Edition, Oxford University Press.
- 竹林滋, 東信行, 高橋潔, 高橋作太郎 (1988) 『アメリカ英語概説』大修館
- Wakelin, Martyn F. (1972) *English Dialects: An Introduction*, Athlone Press of University of London.